無価値の意味

石川憲彦
ishikawa noribiko

精神医療がブームを迎えている。患者数、診療所数、医療費、投薬量などの主要な指標はこの十年弱で倍増した。増加の主体は統合失調症などの古典的障害ではなく、新型うつ病、適応障害、発達障害など新しい障害である。欧米では若者の三〇％近くが発達障害とみなされる地域もある。

もともと精神障害〝dis-order〟という概念は、十八世紀前後に登場した。「秩序」「命令」orderの否定disを意味し、〝ease〟（「楽」「容易」な身体状況）や〝ability〟（能力）の否定である身体の疾患〝dis-ease〟や障害〝dis-ability〟と区別される。新たな診断も同様で、純粋な生物学上の変化（新病変の出現、医学上の新発見など）の産物ではない。不況、就職難、貧富の格差など、近年の社会的不安定が生み出したものだ。

従って、本来、医療が介入する話ではない。ごく短期間であれば、個人の不安・不満・不審の解消に対症療法が有効なこともありうる。しかし通常、上記障害は長期化する。対症療法が中長期的に行われた場合、有効だとする報告は信用性に欠け、逆に有害性の指摘が増加している。例外は存在するとしても、現在の精神医療はリスクが高すぎる。

にもかかわらず、なぜ今ブームが起こっているのか？

本稿では、リスクの詳細は別稿に譲り、現代社会に特有の不安定さと医療の役割について臨床的な考察を試みる。そのために、まず来院する若者の訴えから、新障害に共通する二つの特色を紹介しておこう。

●

第一に、不安定さの大部分は、生存を脅かすような事態（重大な病、愛する者の死、明日の糧の不在、極度の苦痛など）と直接的に関係することが少ない。それは、何とはない日常のささいな出来事と結びつき、容易に抵抗不能な巨大なイメージへと肥大化させられていくように見える。

第二に、訴えの内容が、症状ではなく、次のような自己認識――自己点検、自己確認、

自己評価など――に集中しやすい。自己責任が取れない、自立する自信がない、自己に向けられる視線が怖い、自分は生きる価値がない、など。これら絶え間なく自生する自己認識は、時に自罰性を強めて自己存在の否定にも至る。

小さな不安定さの巨視化と堂々巡りする自己認識。この二点は、障害者に特有のものというより、現代の若者に共通する気風と考えるほうがよいのかもしれない。大人からすると、つい「この程度のことで」とか「すぐ失敗を恐れて殻にこもる」などと批判したくなるような「ひ弱な甘え」にも見えよう。

しかし、ことは個人の力量（自力）に還元できるほど単純ではない。そもそも、鍛えれば耐性を獲得できる不安定さというのは、その対象が具体的な困難から生じる場合に限られている。ところが今日の不安定さは、内面の世界で巨大化させられた煩わしさに由来するので、あいまいなまま下手に鍛えようものならむしろ堂々巡りを強化させかねない。巨視化されたイメージを相対化して適切な認識に自己を定位させる。否定的な評価の堂々巡りから自己を外界に向けて解放させる。このような精神操作を自力で行うには、若い人ではまだ力量不足だ。

従来ならこのようなとき、あらゆる自己に常に開かれている「自然、社会、人間関係、もの、こと、など」の「他者性」が、豊かな力を貸してくれたものだ。しかし、来院する若者たちは、他者性を見いだせない、あるいは信頼できないといった閉塞感のなかに閉じ込められている。私は、医療に他者性を求める閉塞感のあがきが上記ブームを生んだと考える。そして、この閉塞感は以下のような長い歴史のなかで、徐々に形成されてきたと考えている。

●

文明の黎明期から文献記載を認める古典的うつ病やてんかんを別にすれば、古典的精神障害は、過去には能力、性格、憑依などとしてポジティブな意味も与えられた社会存在の様式であった。例えば、十九世紀以後最大の精神障害と考えられてきた精神分裂病（現在、統合失調症）も、十七世紀以前にはどの文献にもそれらしい記述を見いだせない。医学が中心症状とする幻覚・妄想・思考障害は、日常生活で重用される才能であったのではないかと推測されている。夢幻の境に遊ぶなどという表現が日本にあるなら、旧約聖書には一味違う次のような記載がある。「その後、わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。……老人は夢を見、若者は幻を見る」。

しかし産業革命後、列強は富国強兵のため工業とその知識を重視し、霊に意味を見いだすような自然依存的な生活や知恵を否定し始めた。そのため、子どもを洗脳し直す公教育と工業生産に不適応な大人を収容する施設の拡大が、重要な国策となった。後者は、機械作業の苦手な"dis-ability"（身体障害）や、秩序からはみ出す"dis-order"（知的障害、統合失調症など）を社会から隔離した。この新たな人間管理のため導入されたのが、魔女狩り批判に端を発する人道的治療である。

人道主義は、科学的観察結果を以下のような時間観で解釈することによって、生の讃歌を普遍的価値へと高めようとした。「歴史は未来に流れ、生物は進化し、ヒトは理性的成人に発達する」。進歩史観を進化論、発達論に重ねた「未来に楽天的に進行する」時計的時間観は、西洋医学にも機械的で直線的な両極対立図式を持ち込んだ。すなわち、光（価値の世界）の極に「ただ一度の代参不能な絶対的実体」として未来のある生を絶対価値として置き、対極の闇（意味の世界）に生を妨害する虚としての老病死を据えた。

この時間観に、生産を拡大する空間技術が加わることで、近代の時空観（機械論）は完成した。顕微鏡も望遠鏡的も、海底潜航も宇宙飛行も、音声も書字もネットも。即、感覚操作も実体移動もコミュニケーションも、ミクロからマクロへと空間的自由を無限大に保障される。この空間技術の開発した成果は偉大で、人間機械論を人々のイメージに浸透・

支配させていくには十分であった。その偉業の一端を、以下に示したい。

●

有史以前から人類を苦しめ続けてきたのは、疾病、天災、事故、戦争、貧困の五大死因である。これらが猛威を振るった明治以前、日本人の平均寿命は、恐らく四十歳以下であったと推定される。ところが第二次大戦直前には五十歳、現在では八十歳を超えるようになった。主要死因も、癌・心臓病・嚥下性肺炎・脳血管障害など「老化の必然」に様変わりした。

この間、医療が単独で延長させた寿命は、最大でも五年程度と見積もられている。奇跡の延命の真の主役は、防災、安全管理、住環境、栄養状況、衛生状態など、生存条件を根本から改善し、実体の余剰生産によって生物史上未曽有の「快適な生活」をもたらした工業だった。一八八〇年から一九八〇年の間に限れば、重工業の指標（鉄鋼生産量など）と平均寿命の成長曲線は、ほぼ同一と言っても過言ではない類似を示す。比喩的に語れば、自然神が数億年かけて人類に与えた寿命を、工業神はたった百年余で倍増させたのだ。

私は、両神の違いを次のように理解している。自然神は、時空を超えて生老病死を生気のもとで有機的に循環させながら、人間に虚実取り混ぜて質素なパンと神の言葉（意味）を与える。人は、神の前だけでは無力で、何者でもない。一方、工業神は、実体化できる時空のなかで、老病死を克服して美味なパンを過剰に生産し実体的な生と富に価値を与え、虚を無意味の世界に追放する。人は、生ある限り神の支配権に参入可能な存在となる。

西洋医学が高い救命性を発揮するのは、身体の急性変化に対する治療に限定されている。それでも、上記の成功によって、工業神は自然神に代わり主神の座を徐々に獲得していく。その結果、医療も、本来非力な分野にまで手を伸ばし始めた。出産から老化までの健康管理、リハビリテーションや予防医学などのＱＯＬ（生活の質）改善、清潔・予防接種・除菌グッズ・脱臭などの過剰な衛生教育。ついには美容整形・不妊治療から安楽死・尊厳死に及ぶ生命の格付けまでを、医療が管理する時代になった。

救命には無力な精神医療も、「快適で便利な生活の質の維持」には参加可能だ。しかし、向精神薬の多くは、一時的に気を楽にしてくれるものの、最終的死亡率を高める恐れが極めて高い。これを推進するなら、虚からの実の分離を存立の基盤としてきた工業神に、虚実のすり替えを容認させることになる。

実は、一九八〇年代から鉄鋼生産量が減少に転じ、平均寿命の延びを支える主体が情報産業に移行し始めた。ＩＴなどと呼ばれ工業神の伝統を継ぐこの産業が、生産（と表現すべきか迷うのだが）するのは実体ではない。非実体的な情報（イメージ）、つまり虚である。この変化が、工業神の矛盾を徐々に重大な弱点へと転換させていくことになった。

最近になって、自然神が人間と自然との間に創造してきた自然的時空の立体的成熟性・調和性に比して、工業神の時空があまりにも部分的で全体性に欠けると、人々が気づき始めた。原発事故は、細胞の幼若化や遺伝子操作などの開発する神の領域の技術が制御不能性と表裏一体をなしており、工業神には高い知性と幼児性が同居していることを明らかにした。

はるかに深刻な問題も判明した。自然神の創造した寿命も工業神の追加した寿命も、時計的時間だけで比較すればまったく同じ四十年だ。しかしその維持のため、後者が必要とするエネルギーは、前者の二百倍にも達する。爆発的な人口増加、枯渇する環境資源、進行する環境汚染など、工業神自らが拡大発展させてきた現象が、己の存立基盤であるエネルギー資源の枯渇を招きつつある。自然科学は自然神の法則の一部を利用し、工業神はその実体的資源を自然神から借用し続けてきたに過ぎない。最初からわかりきっていたこの当たり前の単純な事実に、人々は今さらのように気づかされたのだ。

●

さて、冒頭のブームに戻ろう。ITの支配する今日、若い人たちは実の世界では生活が成り立たず、拡大する未来イメージを信じられなくなった。しかし、工業神が信じられないからと言って、虚実の混乱によって見失ってしまった自然神の姿を、虚の情報の洪水のなかに再発見するのは容易ではない。時空観の再構成を求めて動こうとしても、虚実をすり替える罠は、余りにも多く待ち受けている。

例えば、欲望の罠。実体生産が君臨する限り、実体を超える虚構が消費を支配することはない。この点では、工業神といえども、自然神のルールを引き継いできた。いかに強欲な人間も、自然界では他人の十倍は食せないように、工業生産性がいかに増加しようとも百台の高級車は乗りこなせない。この生産と消費のルールは、交換価値にも反映される。自然的な物々交換のルールは、貨幣経済にも引き継がれてきた。だが、生産も消費も自由な虚業社会が金本位制を解除すると、たった一言のツイートやタッチの差の投機で他人の数万倍の富を生み一瞬で失うような価値が支配する。虚業によって実体的充足という満足の本質を攪乱された欲望は、方向性を失って肥大化させられ、常にささいなことで失望と不満を拡散させることになる。

罠は欲望だけではない。工業神は、自然神が霊を媒介に意味を与えたのに対し、生の讃歌によって社会的価値を与えようとしてきた。そのため、製品の交換価値であった貨幣を、評価・測定可能なものとして人間評価の価値基準に据えた。実体生産が安定的成長を遂げ、公平な分配が行われる限り、この価値は人に安心と安全を与えることができた。しかし、次々と気まぐれに価値を変更し続ける虚業が支配すると、目まぐるしい流行の変動から取り残されまいとして、人々はささいな日常の変化に気を使って緊張し、不安を強め、疲れ消耗する。

不満、不安、疲弊。これらの罠から脱出しようとして、多くの若者は他者に縋ろうとする。しかし、自然を見失い、虚実の引き回しに不信を抱く若者たちが頼るのは、怪しげな他者であることが少なくない。カルト、霊魂パワーブーム、偏狭なナショナリズム、そして精神医療。これらの怪しさを嗅ぎ取り、社会の罠にも他者性の嘘にも不安や不信を抱く者たちは、ごく素直に環境との関係を断ちたいという誘惑に陥る。

引きこもり、ニート、野宿生活者、そして精神障害者。彼らは、待ち受けるのが小さな不安定さの巨視化と堂々巡りする自己認識の罠であるとしても、意味も価値も見いだせない現代の他者性や虚実の錯乱と付き合うより、手馴れた安定感を選択する。

若者は幻を見る。戦乱と圧政のもたらす貧困、疾病、天災の渦中で、苦難の終結を預言したヨエルの祝福の言であった。約七十年前、日本人も平和な世界の再生による祝福を夢幻に託した。だが今日、老人の幻は認知症の症状、若者の夢はレム睡眠の産物とする医学的な図式のなかで、夢幻は意味も価値も失ったように見える。私たちに再び夢幻が与えられる祝福は、再び惨禍を体験し自然神の前に無力な姿を曝け出すときまでこないのだろうか。

一つだけ見る夢がある――四十年余障害児医療に携わらせていただいたおかげで、私は無力を晒し続けて生きるしかない人々と出会い続けてきた。重度とされる障害者との長い治療過程では、価値を再付与できないことが多い。医者という自己認識を捨て、ただ無力な老人として出会うだけである。正にそのときである。無価値と無力の閉塞感漂う闇のなかに、確かな意味に満ちた他者と共にいる強い喜びを感じることがある――老人、精神障害者、野宿生活者など、拡大する未来を喪失した無価値な人間が、無力を共有して共生するなかに自然神の祝福が待っている幻夢である。

（いしかわ　のりひこ・精神科医、林試の森クリニック院長）
著書に『みまもることば』ジャパンマシニスト社